シモツケコウホネの持続可能な保全活動の在り方とは

地域名　日光市小代地区
パートナー　日光市役所

１０班　コミュニティデザイン学科　伊東拓海　小倉秀斗
建築都市デザイン学科　小山翠　佐賀一星
社会基盤デザイン学科　星野妃美

背景

シモツケコウホネは、環境省のレッドブックデータで「絶滅危惧種IA類」「国内希少野生動植物種」に指定されている。貴重な植物であり、保護の必要性がある。国内に生息地はわずかしかなく、その一つが日光市小代地区である。また水路の中に生息する沈水植物であるため、環境の変化に弱く、水路内の外来種の除去・水路周りの雑草の除去などの環境を維持する取り組みが必要である。

これらの活動は、主に地域住民で構成される「シモツケコウホネと里を守る会」会員の手によって行われてきた。平成17年に発足されたが、年を重ねるごとに会員が減少しており、また高齢化が進んでいるため今後活動を進めていくにあたり、人手を確保することが求められている。

図1　保護活動の様子

図2　シモツケコウホネ

目的

活動では草刈や外来種の除去作業など肉体的な負担が大きく、お年寄りには大変な作業がほとんどである。また、毎月活動を行う必要性があることから、活動の担い手を確保するにあたって、地元の小中学生が今後活動に携わっていくことが最も望ましいと考えた。

そこで日光市小代地区付近に住む小中学生が、シモツケコウホネを認知しているのか、シモツケコウホネ保護活動に対してどのように考えているのかを明らかにする。

また、結果から子供たちが保全活動に対して抱くイメージと現状の保護活動の違いを明らかにすることを目的とした。

方法

〇調査対象

地元の小学５・６年生（落合東・落合西小学）
中学１年生　（落合中学校）

〇調査方法

日光市の協力を得て、学校にアンケート用紙を配布。学校にて回答してもらい、これを後日回収した。

〇実施期間

９月上旬

〇回答人数

N=124　（小学生75名、中学生49名）

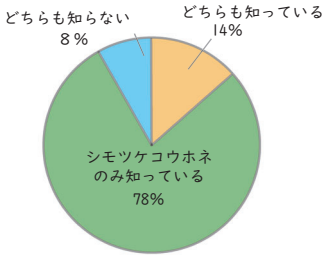
分析結果

〇地元の小・中学生に調査を行った結果、小学校の生活科の授業を通して学習していることもあり、「シモツケコウホネ」は認知されている。

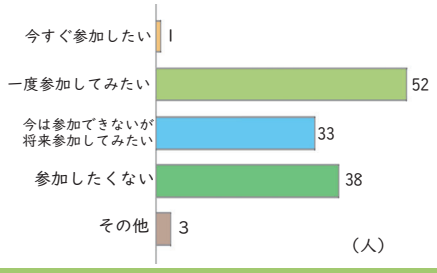
〇一方で「シモツケコウホネと里を守る会」とその活動はあまり認知されておらず、参加してみたいと興味を持つ学生も多い。

そこで、「シモツケコウホネと里を守る会」の具体的な取り組みや歴史をまとめた動画を作製し、落合地区の小・中学校に教材として提供することで、保全活動の意義を伝える取り組みを提案する。

Q. シモツケコウホネと守る会について知っていますか



Q. 保護活動に参加したいと思いますか？



提案

シモツケコウホネ×教育

～多世代にわたる参画を目指して～

「シモツケコウホネと里を守る会」代表の柴田さん、新潟大学志賀准教授のインタビュー動画を撮影し、これをもとに下記の媒体の特性に合わせて、複数の広報動画を作製した。

日光市役所
・利用者
・始まった経緯や活動内容希少価値などを伝える。

SNS
・若い世代向け
・短く簡潔に保護活動内容を説明

You Tube
・幅広い世代
・シモツケコウホネの希少価値や保全活動内容など

また、YouTube向けに作成した動画は、アンケート調査を配布してもらった小中学校に送らせていただき、総合の授業などの教材として使っていただくことを提案したい。
すでに行われている、地元小学校の見学会で実際に見て、体験してもらうことで保護活動の実態を知り、興味を持つことで、将来的に活動に参加することを促すことを提案したい。

図３　ヒアリング調査の様子

地域の小中学生をメインターゲットとしつつも、様々な世代に伝える必要性もあることから、左の３つを選んだ。
またこれらの各動画にはシモツケコウホネの歴史や守る会の保全活動内容に加えて、保全活動への参加者を募っていることも合わせて伝えることで、活動に興味をもってもらうことを提案した。

総合などの時間に動画を視聴し理解を深めてもらう。

⇩

見学会で実際に見て体験してもらう。

⇩

保護活動への参加を促す

シモツケコウホネ×農業

～すべての人にとって魅力ある保全活動を目指して～

現状

シモツケコウホネは前述したとおり、水田につながる用水路に自生しており、農家にとっては除草の対象であったため数を減らしてきたという苦い過去がある。このこともあり、現在では年に１回農家の方と意見交換会が行われ保全活動について議論されてきた。
→保全活動が農家の人にとっても魅力あるものとなれば、地域全体として保全活動に前向きに取り組めるのではないかと考えた。

そこで「シモツケコウホネと里を守る会」の方々と新潟大学志賀准教授との話し合いから生まれた案が、**シモツケコウホネに関連したブランド米を作る**ということである。

提案

シモツケコウホネの生息する地域で作られたお米を「シモツケコウホネの里」としてブランド米にすることで自然豊かな地域で作られた無農薬のお米として販売することができ、農家にもメリットのある仕組みを提案する。
これは新潟県佐渡市の「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」の事例を参考にした。佐渡市ではこの制度開始を契機として、佐渡全体でトキを中心とした環境づくりを重視した米づくりが広がっていった。
この事例を応用することで、地域の人々すべてにメリットがある保全活動の実現が可能になると考えた。